

恵まれた日々

徳島県

鳴門市光武館道場

中学2年 後藤 彩 柝

約六年間、剣道を続けてこんなにも剣道がしたくてもできなかったことは初めてでした。たった一つのウイルスのせいで世界が狂いました。予定していた試合や練習試合、あげくの果てに稽古も禁止になりました。

私が中学校一年生の時、二年生は一人、同級生も一人しかいなかったの、沢山いた三年生が引退してからはたった三人で戦ってきました。五人で行う団体はいつも二人分の黒星、四本分とられた状態からのスタートで、誰かの負けが即チームの負けになるので常に背水の陣でした。それでも大好きなチームメイトと試合に出られるのは楽しかったし、勝てたらとても嬉しかったです。

自分が二年生になった時、「一年生を沢山勧誘して、絶対五人で団体に出るんだ。そして、たった一人で私たちをひっぱってくれた先輩との勝ち試合の思い出をもっともっと増やすんだ。」と意気込んでいました。来年度の試合予定も何ヶ月も前から決まっているものが沢山あって、泊りがけで行く県外遠征は、普段とは違う仲間の姿を見ることができるので特に楽しみにしていました。

雲行きが怪しくなってきたのは、二〇二〇年二月、中国で発生したウイルスが爆発的に広がっていると世界が騒ぎだしたのです。その時は「他国の話」として軽く聞き流していました。しかし、その状況が一変し、ウイルスが日本にも入ってきて、突然、学校が休校になりました。不要不急の外出が禁止され、もちろん部活もできません。いつ学校が再開されるのかわからない中、楽しみにしていた試合の中止報告だけが次々に届きました。

しかたないことだとも、誰が悪いわけではない事も、中止にしてくてるのではないことも理解していたけれど、剣道の時間が、仲間との思い出が、今までの頑張りが削られていく、無くなっていくことが寂しくて悔しくてたまりませんでした。

五月、ゴールデンウィークが明け、やっと学校が再開されました。先輩の引退まで約二ヶ月、この時点で予定されていた全ての試合が、白紙になりました。

部活動も飛沫感染予防を万全にして少しずついい範囲が広がっていきましたが、自粛期間中に鈍った体は思うように動かず、練習試合さえ組めない状況に気分はどん底でし

た。

そんな中、唯一の光明は一年生が二人入部してくれたことです。これで念願の「五人」が揃いました。「いつでも試合を再開してくれて構わないぞ。」と、気合が入りました。しかし、それからひと月経っても、県外はもちろん、県内ですら試合再開の目処はたちませんでした。せっかく五人集まったのに、本当にこのまま、一度も試合をすることなく先輩は引退をしてしまうのかと焦るような気持ちだけが募っていた頃、先生や連盟の方々が総体がなくなってしまった三年生のために開いてくれることになった錬成会に私たちのチームも呼んでくださりました。

順位のつかない大会だったけれど、去年競った他校の三年生とも戦えたし、先輩がいる最初で最後の五人のチームとして団体戦ができてとても嬉しかったです。

ひとつの試合が終わったら次の試合があることが当たり前だと思っていた日々が、どれだけ恵まれていたことだったのか、今回本当に身にしみて思いました。

私の大好きな剣道は、私ひとりだけでできるものではありません。しかし、私の周りには、上達を信じ指導してくださる先生方、応援してくださる保護者の方々、温かく見守ってくれる家族、そして共に支え合う仲間がいます。このことが、どれほど恵まれて幸せなのかということ、剣道ができる毎日が当たり前ではないこと、今ある「普通」が一瞬で消えてなくなるかもしれないこと、それらを心の片隅にしっかり留め、これからも一生懸命に悔いのない日々を過ごしていきたいです。